

ThorensTD124 の導入(3)

トランスの検討(1)

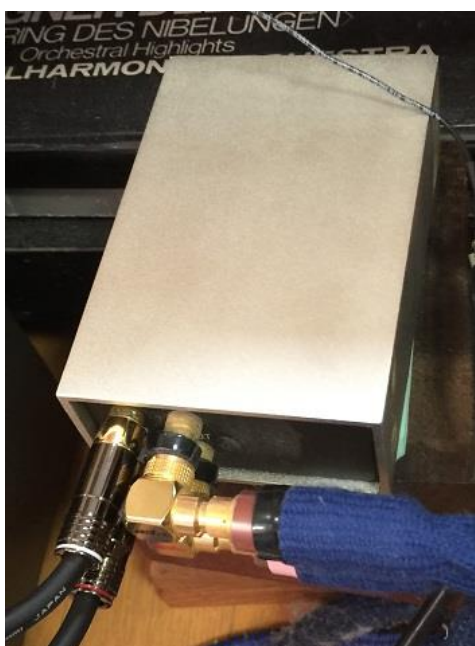
1. 始めに

前報(1)でレストアが完了し、前報(2)で動作確認が終了しましたので、本格的な試聴に入ります。

2. ThorensTD124 の試聴方法

今回は、カートリッジは前報(2)の SPU Synergy のままとし、トランスを替えて若松通商の Maraz7 タイプのプリ経由で聴いて行きます。

トランスは、Ortofon の STA-6600L と ST-7 を使用します。



STA-6600L



ST-7

試聴音源は、聴きなれた下記を使用しました。

LONDON SLC 1138

ファリャ 三角帽子

アンセルメ指揮スイスロマンド

ARCHIV(日本ポリドール) 28MA 0020

J.S.Bach チェンバロ協奏曲

トレヴァー・ピノック指揮イングリッシュコンサート

harmonia mundi(Deutche) KUX-3248-H

ミトマニア
ベーレン・ゲスリン
キングレコード SKA-104
愛と自然の歌
倍賞千恵子

3. ThorensTD124 の試聴方結果

前報(2)では、STA-6600L と若松通商の Maraz7 タイプのプリ経由で聴き始めたところハムを拾っていましたので、プリへの引き出しケーブルの接触不良ではないかと考え、写真のように L 型コネクタを使用して太目のケーブルが L/R 端子がぶつからないようにして接続し、この状態で上記音源を聴いていきました。

三角帽子では、打楽器や拍手の立ち上がりもよく切れ味の良い音がします。

チェンバロ協奏曲ではバロックアンサンブルとチェンバロの爽やかで繊細な表現も再現されています。

ミトマニアでは、ボーカルの抜けがよく、バックの古楽器の質感も十分です。

倍賞千恵子は、ボーカルのニュアンスやバックのバランスも採れています。

これまでの印象では、SPU Synergy は、押出はよいものの、繊細な表現には難があり、STA-6600L はややナローレンジの感がありましたが、上記のようにそういった印象は払しょくされ、SPU とアームの RMG212 との相性が良いことの現れと思われます。

次にトランスを ST-7 に替えますと、三角帽子では、STA-6600L より立ち上がりのダイナミックスは弱まり、おとなしく平面的な表現になります。

チェンバロ協奏曲では、切れ込みの良さは STA-6600L より後退し、スタティックな表現になります。

ミトマニアでは、押出は STA-6600L より弱く、その分すっきりとした歌唱になります。

倍賞千恵子は、STA-6600L とほとんど変わりませんが、若干細目ですっきりとした表現になります。

なお、ST-7 は STA-6600L よりゲインが低く、ボリュームをあげると、残留ノイズが大きくなります。

4. まとめ

STA-6600L と ST-7 は、同じオルトフォン系のトランスで、音色は大きな差はありませんが、表現のニュアンスの差がでます。どちらかと言えば、STA-6600L の方が、オルトフォンの SPU らしいダイナミックな表現を引き出しているようです。

以上